

学習者コーパスに基づく英語学習者が過剰使用しやすい表現の使用頻度のアジア圏における比較

吉川 寛人

研究目的

- 学習者が過剰使用しやすい表現について、日本とその他のアジア圏の英語学習者、及び英語母語話者の使用頻度を比較することで、アジアにおける英語学習者の英語表現の豊富さについて考察する。

研究課題

- 英語の強意副詞の使用頻度は日本を含むアジア圏の4カ国それぞれの英語学習者と英語母語話者との間でどれほど差があるのか。
- 各国の英語学習者の強意副詞の使用頻度はCEFRレベルが上がるとつれて、英語母語話者の使用頻度に近づいていくのか。

使用するコーパス

- International Corpus Network of Asian Learners of English (ICNALE)
- アジアの10の国と地域及び英語母語話者によって産出された、10,000件以上のエッセイとモノローグを含む。
- エッセイとモノローグはともに、トピックは「アルバイト」と「喫煙」について
- All the learners have been classified into four kinds of CEFR-linked proficiency levels(A2, B1_1, B1_2, B2)すべての学習者データは、CEFRレベルと結びついた習熟度によって、A2,B1-1,B1-2,B2に分類されている。

分析方法

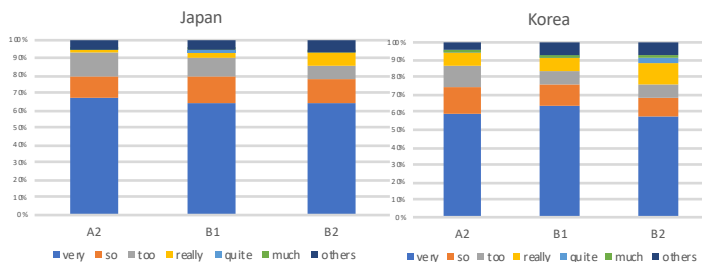
- 本研究では、日本、韓国、中国、フィリピンの4カ国の英語学習者のデータを用いる。尚、フィリピンはESL(English as a second language country)として分類されている。
- まず、これら4カ国及び英語母語話者のそれぞれを対象に、副詞を示すタグ(RB)と形容詞を示すタグ(JJ)のコロケーション表現を検索する。そのうち強意副詞と判断されるものだけを抽出して、集計する。
- さらに、各国の中でCEFRレベルに基づく習熟度によって分類されたグループごとに、同じ手順で強意副詞を抽出し、集計する。

結果

1. 各国ごとの学習者全体の比較

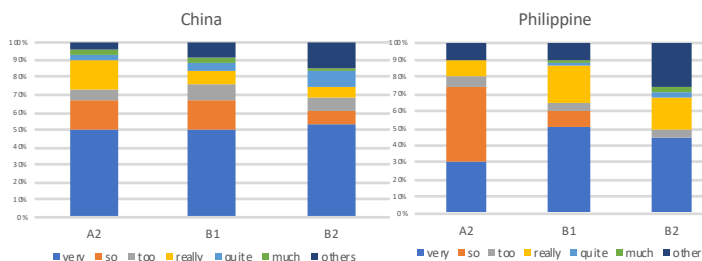
	Japan	Korea	China	Philippine	English Native Speakers
very	723	617	644	288	475
so	159	130	224	45	90
too	123	78	108	30	93
really	38	187	103	124	98
quite	4	15	53	10	35
much	2	12	35	7	13
others	61	79	116	79	219

2. 習熟度レベルごとの比較



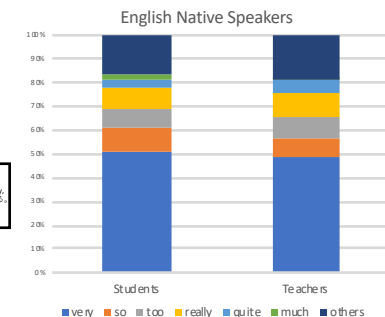
習熟度の違いによる変化はほとんど見られない。いずれの習熟度でも、veryとsoの割合を合わせた割合は80%近くになる。

日本と同様、習熟度の違いによる変化はほとんど見られない。しかし、その他の表現の割合に関してはB1の学習者はA2の学習者と比べて2倍近くになっていることから、表現の多様性は増えていると考えられる。



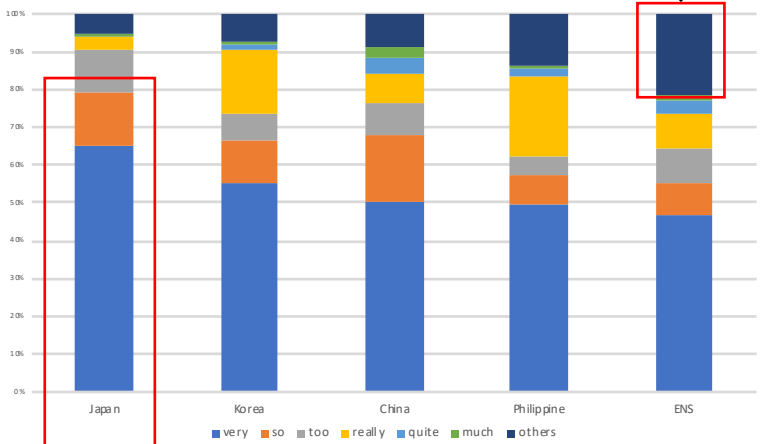
習熟度の上昇とともに、その他の表現の割合も順調に増加している。

A2及びB2の学習者に関しては件数が少なかったため、一概には言えないが、習熟度が上がるにつれて、英語母語話者のデータの割合に近づいているという傾向は見られる。



(参考) 英語母語話者に関しては、生徒と先生の間でも、使用頻度の違いに大きな差は見られなかった。

強意副詞の使用頻度



英語母語話者に関しては、その他の表現(very extremely, completely等)が20%以上を占めている。

考察とまとめ

- 同じアジア圏の英語学習者でも、英語母語話者と比較すると過剰使用している強意副詞があるという点では共通しているが、その割合には差が存在した。
- 日本人の英語学習者は特にveryをかなりの割合で過剰使用しているが、これは、自分の考えを述べる際にvery good/badという表現を多く使用していることが要因の1つと考えられる。
- ESL国の1つであるフィリピンの英語学習者の強意副詞の使用頻度のバランスは、比較的英語母語話者に近かった。
- アジア諸国の中でも過剰使用の傾向が強かった日本は、習熟度が上がっても、その割合に変化はほとんどなかった。
- 過剰使用している強意副詞の割合が比較的似通っていた韓国と中国の英語学習者に関しては、韓国では日本と同様に、習熟度による使用頻度の変化はほとんど見られなかった一方で、中国では、習熟度の上昇とともに、使用頻度の割合の傾向は英語母語話者のものに近づいていった。

日本語学習者には、veryとsoの過剰使用傾向が見られるが、フィリピンの学習者は英語母語話者の割合に近い。

- 日本、韓国、中国の学習者はveryとsoを過剰使用する傾向が見られるが、フィリピンの学習者は英語母語話者の割合に近い。
- それでも、その他の表現の多様性という観点で見ると、フィリピンの学習者の割合は英語母語話者と比べると半分ほどしかない。
- 日本の英語学習者は特にveryを過剰使用しているが、前後の文脈を見ると、自分の意見を述べる際に、"~is(are) very good/bad"という表現を多用していることも原因と考えられる。
- 韓国の学習者は、日本と比べれば、veryの過剰使用の傾向は少ないものの、その分強意副詞reallyを顕著に過剰使用している。